

◆新連載◆ バリューアッププログラム（第1回）

よりよい人間社会を創るために

今日の世相と コミュニケーション

柏木 寛（かしわぎ ひろし） SEF コミュニケーション研究会

現代は、情報技術などが進む一方で、コミュニケーション不足が要因となる社会問題が続出している。この連載では、よりよい人間社会を実現するために、コミュニケーションのあり方を考えていく。今回は、その問題について、今の世相から探るものである。

まず、人間としての基本である、「生きる」ということと「働く」という二つについて考える。

…人の世は、死ぬほど楽はなかりけり、浮世の馬鹿は、“生き”て“働く”。…

生きる

思い返してみると、1982年の末には、岩波書店より、吉野源三郎先生の「君たちはどう生きるか」（岩波文庫）という本が出ている。われわれの今回の試みは、その本の中に記されている「おじさんのNote」に匹敵する役割を持てれば、最高の喜びであると思っている。

生物物理の研究者の言うように、われわれが生きるということは、非線形、非平衡のシステムを形成・維持することであり、死ねば線形、平衡の世界に移ることになる。「生きる」ということに意義を見出さないと、当然システムを維持できなくなる。ちょうど熱力学の第二法則のエントロピー増大に逆らうということが生きるということなのだから。

最近「いじめ」とその結果がもたらす「自殺」が世の中の話題となっている。これらの報道は、

誰も奇異に感じずに伝えられていることが不思議でならない。なぜなら、人間にとて楽な状態である死を選択させるのは、「いじめ」として失敗だと考えている報道がまったくないということである。「いじめた加害者」が責任を取って自殺した話も聞かれない。また加害者の頭の悪さも気になってしまう。なぜなら、「苦しみながら生き抜くのではなく、一番楽で安定な状態に相手を、おとしめること」がいじめであると考えているからである。このような勘違いを起こさせる教育を進めてきたのは、いったいどんな人々なのであろうか（図1）。

責任の所在を知りたくて、今日、世間に伝えられている報道に目を向ければ、教育に携わっている人々、教育長・委員や校長をはじめとする教員の感受性の鈍さが伝わってくるばかりである。これはわれわれが気づかぬうちにどこからきたのだろうか。

若い人々に立派な人間になって、こうした勘違いの数々を正してほしいとわれわれは望んでいる。だからと言って「世の中は、こんなものだ。人間が生きていることは、こういう意味があるのだ。」と一口では説明できない。しかし、夢・希望と好奇心・志が必要であることは確かである。

人が集まって社会を作り、その中の一人ひとりが、それぞれの一生を背負って生きていくということにどんな意味があるのか、どれほどの値打ちがあるのかといったことについて私が教えることはできない。あなた方が社会人になつ



ていく過程、さらに社会人になってからも勉強し続けて、自分で見付けていくしかないものである。母親、父親でも、学校の先生でも教えることはできないのだから。頼るべきは、自分の構想力、企画力しか術はないのである。教養として、構想力・企画力を身に付けるために、学校生活を生かしてほしいと思う。

ギリシャ・ローマ時代からルネサンスに及ぶ時期、一般教養を目的とした自由7科と呼ばれる、高等教育を受けたものすべてが履修した学問がある。そのうち、はじめの4科は、算術、幾何学、天文学と音楽で、残りの3科は、文法・修辞学・論理学である。はじめの4科のうち算術、幾何学、天文学は、数学的であると誰しも認めるところであろう。しかし、音楽は、音階と音の持続時間を扱う教科で、数学的分析を高度に必要としたので加えられたと知る人は少ない。

また、ヒューマン・コミュニケーションの観点から考えると、国語教育で修辞学を親切に教えてくれると助かるのだが、そうはなっていない。高度な修辞法を学ぶために、高名な作家の文章を繰り返し読むことになるのだと思うが、



図1 考えるカエル

そのところは教えてもらえない。どうも、上手に「手段の目的化」を図るため、受け手の児童・学生には、なぜ必要かがわからないようになっている。また、必修と国が決めた科目が履修されていないことが問題になっている。効率化を最優先とした社会で、当面受験に必要な科目的履修はなされないのが当然である。

以前、ある有名企業の先輩との鼎談で、学生の理工系離れが話題となった。そのとき私が主張したのは、文科系の学部では受講するより学外で遊ぶゆとりを持てるのに、理工系を志す学生は必修科目も多く、実験なども伴って学校に拘束される時間が長いということである。経済効率から見て、大卒の資格を取得するのに理工

◆◆◆連載を始めるに当たって◆◆◆

SEF(シニアエキスパートフォーラム)は、産業界を中心とし、豊富な活動実績と高い専門性を持つ、シニアエキスパートが集い、「より良い人間社会」構築の夢を抱き、社会を動かす意気込みを持ち、力を合わせて世のために、人のために役立ちたいとの志を共有するシニア仲間のNPO(特定非営利活動法人)です。

「企業や諸団体の、若い現役の皆さんの各種事業活動を支援すること」と「支援活動を通して、志を同じくするシニア達に、活動の場と生き甲斐を提供すること」の二つのテーマを心がけています。

「高度情報化社会」の声を聞いて久しく、その間IT技術のハード面での進歩は目を見張るばかりです。多元複合化された機器と網(ネットワーク)に支えられた、膨大な情報の錯綜は、インフォメーション・コンプレックス(多元的複合情報)社会を出現させました。

その一方ではコミュニケーションの不足、コミュニケーションの断絶によると考えられる社会事象が多発しています。国際紛争をはじめ、獵奇的犯罪や、頻発する企業の不祥事も健全なコミュニケーションの不足に起因すると思います。

情報の多元的複合化をもたらした主要因は、ハードウェア・システムの急激な進歩にあり、本来のコミュニケーションの概念である、「人間の相互行為として、意思疎通を図ること」を置き去りにし、人と人とのコミュニケーションを退化させたように映ります。

この間に置き去りにされた、ヒューマン・コミュニケーションを中心とする課題の解決こそが「より良い人間社会」

実現のために肝要と考えて、コミュニケーション研究会を立ち上げ、議論を重ねてきました。

その結果、今日見られる憂うべき状況を生み出した元凶は、まさにわれわれ世代の無関心と、無作為にあり、日本経済と雇用の構造変化も、長期にわたる不況によってもたらされたという認識に立ち、これらを解決するための課題を明示します。

第一は、超寿命のブランド企業経営を可能ならしめるための条件、経営者に望まれる資質、従業員の「流動化」をはかるための方策と「技術の継承」といった問題。第二は、社会問題として、教育の役割が変わりつつあり、新規採用の新卒学生(学校)による完全充足は不可能です。教育制度の社会における新しい役割を示すため、何らかの具体的提案と行動を起こす必要があると考えています。

もとより、過去に体得した古臭い知見だけで貢献できるとは、考えていません。したがいまして、われわれの持つ知見の今日化・高度化の努力を進めています。

このたび、コミュニケーション研究会のメンバー8名の考え方を世に問いたく、オーム社の配慮により、オムニバス方式で、公表いたします。政府の審議会や企業の方針のように、統一見解を示すべきとの意見もありますが、雇用関係などの縛りのないNPO組織の特色を生かした手法を用いることにいたしました。お気づきの点がありましたら、遠慮なくご指摘いただければ幸いです。

各人の経験に基づく、特色を生かした、いろいろな見方、考え方を愉しみながら、しばらくの間、お付き合いください。



図2 鳩摩羅什
(350~409年ごろ。中国六朝時代の訳経僧)

系より文系のほうが優れていることになる。財界こそって経済効率を追求すべしと、言っている結果ではないかと主張した。先輩の財界としての見解は、それは財界のことであって、学校教育もそうだとは言っていないということであった。

偏差値教育についても、部品製造の世界の話を教育に流用したのは、技術者ではなく、前述したような教育者自身なのである。かように、工学分野で問題を解くときに、定める境界条件を明確にせずに世の中に流布するため、本当の適用分野の限界がわからないのだ。

受験用の有名学習塾が優れていると、テレビも新聞各紙も、その効用は学校を上回るものとして、つい先日まで高く評価し、学校不要論を報道していたではないか。受験予備校が大学の先生を呼びつけて、入試問題にまで、口出しをしていたのを知る私としては、納得しかねる。地方の有名受験校が予備校化するのを、どこで歯止めすべきだったと言うのか、明確な報道を知りたい。

教育という観点から見れば人間が集まって社会を作るが、その最小単位は個人であり、個人を取り巻く最も身近にあるのは家庭である。次に身近なのは地域社会であり、町村から県、地域、国、そして、人間社会の総体としての国際関係へと広がっていく。このうち教育に関わるのは、国・民族の単位の内側にある。いきなり国際人を育てる発想が伝えられているが、そんなことができる道理があれば示して欲しい。

動 <

江戸の川柳に、「世の中に、寝るほど樂は無かりけり、浮世の馬鹿は、起きて働く。」という

句がある。働くことの意味、「何のために」、「誰のために」働くのかを考えてみよう。

仕事をし、お金を得る。現在は、お金がすべてであると信じて疑わない経済学者や政治家が世の中を席巻している。欧米から都合のよい部分を輸入して、本来の文化的背景からくる意味を“自分の都合に合わせた形”で表現する手法が主流を成している。以前、「翻訳は、文化落差のコミュニケーションである」と言われた人がいたと記憶している。文化の違いを勘案して、翻訳してもらいたいと考えているのは私だけだろうか。

金がすべてであるとの経済学的知見が、家庭内の子供を含む婦女子を駆り立て、外で働くことでいくばくかの現金収入を得られることにより獲得したのは、一億総中流化だった。周りじゅう中流だと思っていたら、気が付くと、ヒルズ族とやらが現れ、格差社会を誇示し、これに政治が追従している。この国では、形のないものに価値観を持つ風習が古くからあった。趣味や道楽の類がそれだし、花火や氷の彫刻なども親しまれてきた。

1963年に梅棹忠夫氏(国立民族学博物館初代館長)は、世界に先駆け、“金”の尺度だけでは表せない「情報産業論」に、複素関数表示することを提案された。何のために働くのかについても、「金のため」、「生きがいを満たすため」といった二つを完全に満たす仕事は、まれにしか出くわさない。ほとんどの場合、己の基準で両者の配分比率を決めて取り組んでいる。



わが国の哲学は、一部、仏教により、高僧を通じて伝えられてきた。そんな中に「四無量心」の教えがある(図2)。これは四つの、計り知れない心を起こすことにより、無数の人々を悟りに導くことを言う。その四つの心とは、「慈」、「悲」、「喜」、「捨」の四種の心を指す。「慈」とは、生けるものに樂を与えること、「悲」とは、苦を抜くこと、「喜」とは、他者の樂を妬まないこと、「捨」とは、好き嫌いによって差別しないこと、だそうだ。

これを、これから的人生の、礎にしていただきたいと願っている。